様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　７ 月　７ 日現在

機関番号：３５４０９
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ２２１５７

研究課題名（和文）ローカル放送局におけるドキュメンタリー制作の文化研究

研究課題名（英文）Television Documentary Production Culture on Japanese Local Broadcasting

研究代表者
丸山　友美（Maruyama, Tomomi）

福山大学・人間文化学部・講師

研究者番号：８０８８２０６８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は，NHK大阪放送局に関する番組資料と制作者の声を収集・考察し，戦前戦後を通じて形成される「上方」放送文化の展開を「制作文化研究Production Studies」の側面から明らかにしたものである。その研究成果は四つにまとめられる。（一）東京／大阪という初期テレビ制作現場の「ローカリティ」を描出した。（二）男性／女性というテレビドキュメンタリー制作の「文化的な性差（ジェンダー）」を指摘した。（三）エリート／アシスタントというテレビ制作者間に生じ始める「断層」を示した。（四）放送内容に直接関わらない〈放送人〉の存在を浮上させ，「上方」放送文化の成立とナショナルな放送文化の展開を析出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究成果の学術的意義や社会的意義は，日本の初期テレビドキュメンタリー史の重層性と複数性として，（一）初期テレビ制作現場の「ローカリティ」，（二）テレビドキュメンタリー制作の「文化的な性差（ジェンダー）」，（三）テレビ制作者間の「断層」を描出したことにある。その成果は，ストリーミング・プラットフォームの登場によって映画やネット動画との差異を問う，1950-70年代に日本でも展開された「テレビとは何か」「テレビ的とは何か」という議論が再燃するメディア研究の国際的な潮流に，日本／大阪／女性／アシスタントというローカルな視角から応えるものにもなりうる。

研究成果の概要（英文）：This study clarifies the development of the “Kamigata” Broadcasting Culture through prewar and postwar from a viewpoint which is Production Studies using various materials about the Osaka Broadcasting Station of NHK and interviews from different producers. This study presents four results: 1) it depicts the “Locality” of television production from Tokyo/Osaka; 2) it indicates the “Gender” of television documentary production from masculine/feminine; 3) it shows the “Fault” between television producers from elites/assistants; and 4) it emerges the presence of <Broadcasters> who were unrelated to broadcasting content and confirms the development of the “Kamigata” Broadcasting Culture.

研究分野：メディア文化史

キーワード：テレビ　ドキュメンタリー　プロダクション・スタディーズ　地方メディア

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究は，戦前・戦後を通じてNHK大阪放送局（以下JOBK）で形成される「上方」放送文化の展開を，人と番組のネットワークから明らかにすることを目的にもつ。これまでNHKの編纂した『放送史』は，東京放送局（JOAK）の足跡を放送全般の歴史と見なしてきた。ほぼ同時に放送を開始したにもかかわらず，放送史ではJOBKやJOCK（名古屋放送局）をNHKに従属する地方局とみなし，番組を生み出す磁場やオルタナティブな特性を軽視してきた。電波の届く範囲の人々が，同じ「時間」に同じ「もの」を聴取／視聴するという共同体験を積み重ねる姿から，放送は国民国家の中心的な文化装置，すなわち東京への収斂として理解されてきた。けれども，JOBKの取り組みを「中央＝東京」に対するローカルとして見直す時，放送における政治的スペクトラムを押し広げようとした試みに気がつく(黒田編 2005:20)。

報告者は，2012-2014年度に実施したNHK番組アーカイブス学術利用トライアル研究でのドキュメンタリー番組の調査や2016年度から主宰する「JOBKのメディア史研究会」での史資料の渉猟を通じて，JOBK の制作者が戦前・戦後を通じて「反中央＝アンチ東京」という意識のもと独自性を追求し，娯楽と教養を結びつけていく「上方」放送文化の萌芽を確認した。また，NHK放送博物館（港区）に所蔵されている一日の放送記録を記した放送確定表の通時的な閲覧と，存命する関係者への関東・関西地区での継続的なインタビュー調査により，教養と娯楽を結びつけていく人と番組のネットワークが見えてきた。こうした視点の獲得は，本研究がメディア表現と情報生産をめぐる制作文化研究へと発展していることを示している。

近年,「社会学やエスノグラフィー，その他関連分野においてメディア制度の「生産の文化」」（レイン 2016:23）を取り扱う文化実践の研究が欧米で盛んになっている。その代表例とされるのが，映画研究者のジョン・コールドウェルらがすすめる「制作文化研究　Production Studies」である（Caldwell 2008; Mayer et al. eds. 2009; Banks et al. eds. 2015）。こうした国際的な研究動向を鑑み，報告者はJOBKの足跡を整理する資料調査に止まらない，在阪の放送局・放送史を分析する具体的な方途を提示するため本研究に着手した。

２．研究の目的

以上のような研究開始当初の背景を踏まえ，本研究は制作文化研究の側面からJOBKに関する番組資料と制作者の語りを収集・考察することを試みた。この目的を達成するため，本研究は，JOBKという磁場の特性を確認し，そこに生きるJOBKの制作者がいかにドキュメンタリーという表現フォーマットの限界と制約を更新し続けたのか検証した。この試みは，特権化される作者の作品内部での役割を論じる作家論や作品論の延長で行われている日本のテレビ制作者研究とは異なり，制作現場における「特有のフォーマルおよびインフォーマルなルール」を抽出し，それを支える「仕組みや文化，制度的枠組み」（林 2013:13）からメディア制作者を見直していく研究の展開と見ることもできる。このような観点を備える本研究は，ストリーミング・プラットフォームの登場によって映画やネット動画との差異性を問う，1950-70年代に日本でも展開された「テレビとは何か」「テレビ的とは何か」という議論が再燃するメディア研究の国際的な潮流に，日本／大阪というローカルな視角から応えるものにもなりうる。

３．研究の方法

以上の目的を達成するため，報告者は以下３つのテーマに基づき研究を進めた。

(1)紙史料および音資料（インタビュー）の収集・整理

大阪の府立中央図書館や国際児童文学館，東京の国立国会図書館や法政大学図書館，放送博物館やNHK放送文化研究所などに協力を仰ぎながら資料を渉猟した。ここでは，人事異動を主とする人の動きや部内誌などを読み解いて番組の通史的変遷を見た。こうした東京・大阪における一次資料の調査・収集に加えて，番組制作者やその関係者へインタビュー調査を実施し，「放送史」から取りこぼされてきたJOBK制作者たちの「声」の史料化にも取り組んだ。2021年度以降は，初期テレビ制作現場における女性制作者やカメラパーソン，そしてポストプロダクションのの役割やその足跡を辿り直すことに注力した。

(2)JOBK史を構成した放送人への聞き取りと資料調査

1995年刊『こちらJOBK』（JOBK70年誌）の編集メンバーとメールや電話等で連絡を取るのに加えて，大阪調査の際には時間を頂戴して面談し，本研究について相談したり，部内資料の調査方法に関してアドバイスを仰いだりした。またJOBKのOBOGに限らず，在阪民放や在阪新聞社・広告会社等のOBOGや現役の方々とも研究ネットワークを構築するように心がけた。

(3)個別の番組分析

テレビドキュメンタリー・シリーズ『日本の素顔』（1957-1964，以下『素顔』）を主として，『現代の記録』（1961-1964）や『現代の映像』（1964-1971）の調査に取り組んだ。また，『社会

の窓』(1948-1954) や『時の動き』(1948-1952) などを手がけたラジオ制作者らの経験が，どのテレビ番組にどのように接続されていったのか明らかにするため，放送ライブラリー（横浜）で番組聴取調査にも取り組んだ。これら二番組については，番組の起源とされるラジオ版 *The March of Time* に関する調査が英語圏のジャーナリズム研究領域で進展していることを確認したため，海外の研究動向にも目を配りつつ分析を進めた。

上記の方法に取り組むことを通じて，報告者は，１年間の延長を含む 2020 年９月から 2023 年３月までの研究期間に次の３つの観点を構築していった。(一) は，放送アーカイブを活用し東京／大阪，男性／女性，エリート／アシスタントという視座から，日本初のテレビドキュメンタリー・シリーズ『日本の素顔』(1957-1964) を見直すことである。(二) は，収集した紙史料（局内外で発行された様々な資料）と番組関係者に実施したインタビュー内容を，放送番組という文化的産物を生み出した人々の営みを表象したテクストとして読み込むことである。(三) は，JOBK におけるドキュメンタリー番組制作の実践と理論化の営為を抽出することで，彼ら彼女らの足跡を初期テレビドキュメンタリー史のグラデーションとして加筆することである。

４．研究成果

以上の研究方法に取り組んだ結果，本研究は以下４つの成果を得た。

(1) 東京／大阪という初期テレビ制作現場の「ローカリティ」

本研究の開始以前，報告者は，テレビドキュメンタリーの前史として NHK の編纂する放送史や制作当事者によって繰り返し想起されてきた録音構成というラジオの文化形式に着目して，ラジオからテレビへ引き継がれたものを検討した（丸山 2019)。この成果を踏まえて，本研究では録音構成の系譜がいかに『素顔』に流れ込んでいるのか，東京／大阪というように初期テレビ制作現場ごとに考察した。この作業から明らかになったのは，東京『素顔』の制作者の間では克服するべきものとして捉えられていた録音構成の手法をテレビに持ち込むやり方が，大阪『素顔』の制作者の間では積極的に応用すべき制作手法として理解・共有されていたということである。

本研究は，そのようにして明らかになった録音構成からテレビドキュメンタリーへの連続性を，次の二点において「JOBK らしさ」として評価した（丸山 2021b)。一つは，「神の視点」から戦後日本を映すことにより，それをあたかも現実であるかのように提示する東京『素顔』のリアリズムの形式とは異なり，JOBK の制作者たちは，現代社会を生きる「いろいろ」な人々の声をあるがままに提示するポリフォニックなテレビドキュメンタリーのスタイルを開拓していたという点である。もう一つは，このような表現スタイルを生み出すことで大阪『素顔』は，東京『素顔』のように理知的な議論においては常に問題として取り上げられ，自らが主張する言葉も機会も与えられてこなかった社会的弱者の声を表出する場を彼ら彼女らに提供し，その存在をあるがままに肯定し，認めていくような「ヴァナキュラーな公共圏」(長谷 2017:203) をテレビドキュメンタリーという表現形式によって立ち上げていたという点である。

(2) 男性／女性というテレビドキュメンタリー制作の「文化的な性差（ジェンダー)」

(1) で確認した固有の哲学や方法論を理解・共有していた制作集団 JOBK に迫るため，さらにそこで活躍した『素顔』唯一の女性制作者に注目し，彼女を取り巻く技術的・歴史的背景や表現自体を詳細に検討した。その結果，性別によって労働と人間を区分して，文化的にも政治的にも空間を編成して行こうとする初期テレビ制作現場の権力作用の実態を明らかにした。

これを，本研究は次の 2 点においてテレビドキュメンタリー制作をめぐる「ジェンダー」の問題として提示した（丸山 2022b, 2022c)。一つは，テレビドキュメンタリーを制作するという労働が，ラジオからテレビへメディア技術が移行したことで「男性的」なものとして構成され，初期テレビ制作の現場においてジェンダー化されていたという実態である。もう一つは，ジェンダー規範に基づき行動すれば組織規範を満たせる男性スタッフと，ジェンダー規範に阻まれて組織規範を十全には満たせぬ女性スタッフの間で生じていた「ジェンダー化された組織」(Acker 1990) に起因する格差である。このようなテレビドキュメンタリー制作をめぐるジェンダーの問題は同時に，「ジェンダー化されたアーカイブ」という新たな問題を立ち上げもする。というのは，放送アーカイブを使って 1950 年代から 1960 年代までのドキュメンタリー番組を検索すると，そこでは女性制作者の名前も女性ディレクターが制作した番組もほとんど見つけることができないからだ。ここから気づかされるのは，過去の番組を収集・保存し，公開していくアーカイブという営みもジェンダーの問題を抱えているということだ。これについて報告者は，科研費「フェミニスト・エスノグラフィーを用いたドキュメンタリー表現の制作文化研究」(22K13554) を通してさらに研究を進める計画である。

(3) エリート／アシスタントというテレビ制作者の間に生じ始める「断層」

(1) で見た東京／大阪という制作現場のローカリティが縮減していく様子を，NHK の人事政策から検討した。その結果，〈東京〉がさまざまな「制作現場の知」の坩堝となり，ローカルな知や経験が東京・本部局で衝突したり合流したりすることで，テレビドキュメンタリーという表現形式が新たな段階へ突入していくプロセスが明らかになった（丸山 2021b)。

不運だったのは，そのような人事交流が，各地の放送局で活動する番組制作者たちの「表現

の自由」を後押しするものとしてではなく，〈東京〉に栄転し，出世するための方策としてテレビ制作現場を生きる彼ら彼女らに理解・共有されるようになっていったことだろう。これは結果として，東京と大阪で醸成されていたテレビドキュメンタリー制作をめぐる制作現場のローカリティを喪失させる一因になっただけではなく，東京・本部局と JOBK を筆頭とする中央放送局や放送局で働く制作者の間に，エリート／アシスタントという断層を生み出すことにつながった。この断層は，組織に属して表現することを生業にする「〈サラリーマン表現者〉」(尾原 2016) の生命線と人事考課が結びつくことで構成されたため，中央放送局や放送局に配属された多くの制作者たちは否応なしに出世競争のレースに駆り出されることとなり，彼ら彼女らはうまくサバイブすることが求められるようになった。

(4) メディア遺構のラジオ塔から浮上する放送内容に直接関わらない〈放送人〉の存在

本研究を遂行する過程で，JOBK が戦前・戦中に建設したラジオ塔に関する資料も渉猟した。報告者は，かねてより関西に残るラジオ塔についての調査に取り組んでいたが，本研究の理論枠組みである「制作文化研究 Production Studies」の視点からこれらを読み込んでみると，メディアインフラの痕跡としてではなく，「放送内容に直接関わらない〈放送人〉の存在」を浮上させる重要なモノであることに気がついた。それはつまり，聴取加入者を増やしたり，加入契約を維持したりするために活動していた計画部／総務部企画課の人々を〈放送人〉として評価することの必要性である。この気づきは，本研究が「ローカル放送局におけるドキュメンタリー制作の文化研究」を標榜しているにもかかわらず，放送局内の権力作用（経営者／勤務者，制作部門／事業部門，メディア制作者／非メディア制作者）に無頓着であるという自覚にもつながった。そこで，テレビドキュメンタリー制作が JOBK で始まるずっと前，すなわち 1925 年のラジオ本放送開始の時代まで時間を遡り，「JOBK らしさ」が局内でいかに醸成され，放送内容に直接関わらない〈放送人〉の活動を通してどのように確認できるのかという検証を試みた。

一つ目の拙稿（2021a）では，JOBK がラジオ塔を建設した理由として，放送事業者の頭を悩ませた「聴取者加入廃止」の抑制対策の一環でラジオ塔というメディアを企画・開発していたことを指摘した。それはつまり，ラジオ塔が「常設受信拡大装置」という「「ラジオと共にある生活」の意義を，［聴取者］自らの生活の中に見出していくモノ」（丸山 2021a:22）として〈放送人〉が開発していたという「JOBK らしい」ローカルな放送史である。だが，彼らの考案したラジオ塔は，1932 年に聴取加入者 100 万突破という日本放送協会による記念事業に組み込まれたことで，その意味を大きく変容することになる。それが，「国家非常時に放送を届けるのに社会的役割を担うモノ」として東京＝中央で解釈し直され，「公衆用聴取施設」として全国各地に増設されたラジオ塔に付与された新しい役割である（丸山 2021a:21-22）。

二つ目の拙稿（2022a）では，拙稿（2021a）の結論を批判的に検討するため，横浜・野毛山に現存するラジオ塔を調査して，聴取加入者 100 万突破の記念事業で JOAK が建設したそれにもローカリティを認められることを指摘した。建設経緯を丹念に確認してみると，野毛山のそれは「想像以上に，「場所」の固有性と密接な関係を築いたモノ」（丸山 2022a:24）としてハマっ子の前に現れていたことが明らかになった。ここで見出したローカリティは，JOBK の企図と一致するものではないが，放送局それぞれで理解・共有されていたローカルな知や経験がラジオ塔の建設プロセスに生かされていたことを確認した。

ただし，そのように各地で醸成されていたはずのラジオ塔のローカリティは，日本放送協会が展開した「「一戸一受信機」キャンペーンに組み込まれ全国各地に増設されたこと」で消失し，「建設された理由や由来が国家政策に絡め取られ」た結果として，ラジオ塔の意味や役割は「「非-場所」なモノへと変容」していかざるをえなくなる（丸山 2022a:24）。こうした質的な変容を検討したのが，名古屋に現存するラジオ塔の一部が市民から寄付・寄贈されたモノであることを指摘した三つ目の拙稿 (2023) である。市民がラジオ塔の建設主体になった理由は，「皇太子［現・上皇］誕生を祝」すため，自らが「建設したラジオ塔の下でラジオ体操を実施して，町民一丸となって体を鍛え大和民族の発展に寄与する」（丸山 2023:12）ことを期待していたからだった。このようにして本研究は，関西・関東・東海に残るラジオ塔の調査を通じて放送局内の権力作用を考察すると共に，放送局同士の権力作用についても考察した。

〈引用文献〉

Acker, J. (1990) “Hierarchies, Jobs, Bodies: A Theory of Gendered Organizations” *Gender & Society* 4(2): 139-158.

Banks, M. et al. eds. (2015) *Production Studies, the Sequel! Cultural Studies of Global Media Industries*: Routledge.

Caldwell, J. (2008) *Production Culture: Industrial Reflexivity and Critical Practice in Film and Television*: Duke University Press.

長谷正人(2017)『ヴァナキュラー・モダニズムとしての映像文化』東京大学出版会.

林香里(2013)「「ライフコース調査」「キャリア調査」から見る日本のジャーナリズム」林香里・谷岡理香編著『テレビ報道職のワーク・ライフ・アンバランス--13 局男女 30 人の聞き取り調査から』大月書店，7-40.

黒田勇編(2005)『送り手のメディアリテラシー：地域からみた放送の現在』世界思想社.

Mayer, V. et al. eds. (2009) *Production Studies: Cultural Studies of Media Industries*: Routledge.
丸山友美（2019）「ラジオ・ドキュメンタリー「録音構成」の成立--NHK『街頭録音』と『社会探訪』『マス・コミュニケーション研究』95:143-162.
丸山友美（2021a）「関西に残るメディア遺構--JOBK の建設したラジオ塔」『福山大学人間文化学部紀要』21:13-25.
丸山友美（2021b）『放送アーカイブを活用した初期テレビドキュメンタリー研究--NHK『日本の素顔』（1957-1964）を中心に』法政大学審査学位論文.
丸山友美（2022a）「関東に残るメディア遺構--JOAK の建設したラジオ塔」『福山大学人間文化学部紀要』22:15-27.
丸山友美（2022b）「女性ディレクターから見た初期テレビ制作の現場--フェミニスト・エスノグラフィーを用いたアーカイブ研究」『メディア研究』101:175-194.
丸山友美（2022c）「人と番組のネットワークからテレビドキュメンタリー史の複数性と重層性を描く」NHK 放送文化研究所編『放送メディア研究 15』NHK 出版，201-212.
丸山友美（2023）「東海に残るメディア遺構--JOCK と市民が建設したラジオ塔」『福山大学人間文化学部紀要』23:1-15.
尾原宏之（2016）『娯楽番組を創った男--丸山鐵雄と〈サラリーマン表現者〉の誕生』白水社.
レイン・マイケル（2016）「歌謡映画とメディア・ミックス」細川周平ら編『新領域・次世代の日本研究』国際日本文化研究センター:23-33.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 丸山友美	４．巻 22
２．論文標題 関東に残るメディア遺構ーーJOAKの建設したラジオ塔	５．発行年 2022年
３．雑誌名 福山大学人間文化学部紀要	６．最初と最後の頁 15-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 丸山 友美	４．巻 101
２．論文標題 女性ディレクターから見た初期テレビ制作の現場ーーフェミニスト・エスノグラフィーを用いたアーカイブ研究	５．発行年 2022年
３．雑誌名 メディア研究	６．最初と最後の頁 175-194
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24460/jamsmedia.101.0_175	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 丸山友美	４．巻 21
２．論文標題 関西に残るメディア遺構ーーJOBKの建設したラジオ塔	５．発行年 2021年
３．雑誌名 福山大学人間文化学部紀要	６．最初と最後の頁 13-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 丸山友美	４．巻 23
２．論文標題 東海に残るメディア遺構ーーJOCKと市民の建設したラジオ塔	５．発行年 2023年
３．雑誌名 福山大学人間文化学部紀要	６．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 丸山友美
2．発表標題 放送アーカイブを活用したドキュメンタリー制作の文化研究
3．学会等名 日本マス・コミュニケーション学会2021年春季大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 丸山友美
2．発表標題 テレビドキュメンタリー前史としての「録音構成」ーー『真相はかうだ』と『社会の窓』を中心に
3．学会等名 カルチュラル・タイフーン2021
4．発表年 2021年

1．発表者名 丸山友美
2．発表標題 初期テレビドキュメンタリー史
3．学会等名 カルチュラル・スタディーズ学会若手研究会
4．発表年 2021年

1．発表者名 MARUYAMA, Tomomi
2．発表標題 The Female Producer Involved in Japan's First Television Documentary Program: The Naked Japan (1957-1964)
3．学会等名 Society for Cinema and Media Studies 2022(online)（国際学会）
4．発表年 2022年

１．発表者名 MARUYAMA, Tomomi
２．発表標題 Media Remains in East Asia: Radio Pagoda built by NHK
３．学会等名 International Association for Media and Communication Research 2022(OCP)（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 丸山友美（司会），丹羽美之（問題提起者），谷原和憲（討論者）
２．発表標題 （ワークショップ）民放アーカイブの利活用に向けてーー『NNNドキュメント』を事例に
３．学会等名 日本マス・コミュニケーション学会2020年秋季大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 丸山友美
２．発表標題 関西に残るメディア遺構ーーJOBKの建設したラジオ塔
３．学会等名 日本マス・コミュニケーション学会第37期8回研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 辻一郎，丸山友美
２．発表標題 ラジオ黄金期／テレビ草創期におけるドキュメンタリー制作について
３．学会等名 日本映像学会第6回ドキュメンタリードラマ研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 丸山友美
２．発表標題 初期テレビ放送の制作現場を記述する――「送り手」研究の模索
３．学会等名 日本メディア学会第38期第28回研究会
４．発表年 2023年

１．発表者名 MARUYAMA, Tomomi
２．発表標題 Media Remains in Japan's Tokai Area: Radio Pagodas Built by Citizens
３．学会等名 International Association for Media and Communication Research 2023(OCP)（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 丸山友美
２．発表標題 テレビアーカイブに見る障害者表象と社会的包摂の実践（ワークショップ「日本におけるディスアビリティ・メディア・スタディーズの模索」）
３．学会等名 日本メディア学会2023年春季大会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計1件

１．著者名 ＮＨＫ放送文化研究所	４．発行年 2022年
２．出版社 NHK出版	５．総ページ数 304
３．書名 放送メディア研究　１５	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関